

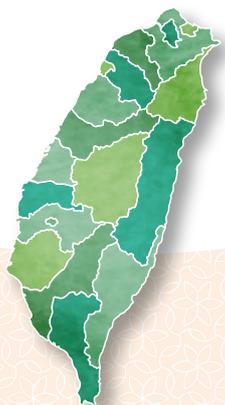


日本と台湾の新時代を拓く

第20回

日台文化交流 青少年スカラシップ

実施報告書



第20回

日台文化交流 青少年スカラシップ



◆ 実施報告

日本と台湾の青少年による文化交流の促進を目指す「第20回日台文化交流 青少年スカラシップ」は、作文部門で学生の作品を募集し、375点の応募がありました。

受賞者による台湾研修旅行も5年ぶりに復活。大賞と優秀賞の計8名の学生が、3月26日から30日まで台湾を訪れ、現地学生との交流や政府機関への訪問を実施し、日台の交流をより深めました。

※第20回はスピーチ部門の募集はありませんでした。

◆ 審査委員

※敬称略・順不同

審査委員長 渡辺 利夫 拓殖大学 顧問

黄明珠 台北駐日経済文化代表処 広報部 部長

阿古 智子 東京大学 総合文化研究科 教授

林 翠儀 自由時報 東京特派員

河崎 眞澄 東京国際大学 国際関係学部教授

桑村 朋 産経新聞 編集局

入賞者

大賞

中学・高校生の部 山本 旭隼 高槻高校 1年 大学生の部 永井 光洋 京都大学 3年

優秀賞

宮川 心 横浜中華学院中学部 1年 下田 隆聖 横浜中華学院高等部 1年
北村 芽依 滋賀県立草津東高校 2年 酒井 菜々子 福島県立ふたば未来学園高校 2年
前田 碧生 東京都立桜修館中等教育学校 5年 牧野 莉乃 中央大学杉並高校 3年

奨励賞

伊藤 華玲 渋谷教育学園幕張中学校 2年 岡上 宏太郎 大阪星光学院高校 1年
東内 祐弥 大阪府立水都国際高校 1年 久保 環季 神奈川県立神奈川総合高校 2年
佐々木 奏哉 横浜中華学院高等部 1年 塩満 理恵 お茶の水女子大学 4年
井戸 麻祐子 金沢大学附属高校 1年 坂本 航志 法政大学 1年
吉田 裕理 徳島県立脇町高校 2年 笠原 葉子 筑波大学 3年
大角 奏歩 専修大学松戸高校 2年 山崎 唯花 大阪大谷大学 4年

※学校名・学年は2024年3月時点 ※順不同

主催: 産経新聞社

共催: 台北駐日経済文化代表処

協賛: JR東海 MITSUI & CO. EVA AIR 臺灣新聞社
TAIWAN NEWS

協力: 外交部 教育部 台湾日本関係協会 Taiwan 台湾観光庁
THE HEART OF ASIA

後援: 公益財団法人
日本台湾交流協会 Japan-Taiwan Exchange Association 自由時報



祝 辞



台湾の知られざる素顔に触れよう

台北駐日経済文化代表処 代表 謝長廷

受賞した皆さん、この度は誠にとてもおめでとうございます。

今年第20回目の「日台文化交流青少年スカラシップ」という節目を迎えることができ、まるでわが子が成人になったような気持ちで、まさに感激の極みです。

コロナ後、台日両国の観光や人的往来が再開し、以前のように交流が盛んになってきました。皆さんの作文の中でも、台湾への修学旅行や教育交流の体験談が多くみられます。そして、今年の「スカラシップ」は5年ぶりに台湾研修旅行を再開し、皆さんに真の台湾を体験してもらうことができました。

近年、台湾についてはグルメや観光のほか、「台湾有事」というキーワードをよく見かけたり、聞いたりするようになりました。日本社会は台湾への関心度が高く、台湾海峡の情勢を心配する人もいます。ただし、台湾のイ

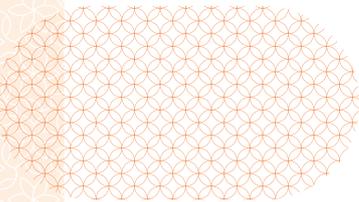
メージは決してグルメや台湾有事だけではありません。

台湾は一つの山のように、様々な側面があり、違う角度から見れば、違う表情が見えてきます。それらは複雑な有機体のごとく、生き生きと活気や生命力に満ちています。今年1月の総統選挙は、改めて台湾が世界に向けて自由と民主主義を堅持する意志を示しました。また、皆さんが台湾の生徒たちと交流した時にも、台湾人の情熱や親切さ、おもてなしなどを感じ取れたことでしょう。台湾の街角を歩けば、必ず台湾社会の賑やかさと包容力、または文化と歴史の多様性に触れることができます。それらも全てありのままの台湾の素顔です。

この度、皆さんは台湾研修旅行で初めて、或いは初めてではない台湾を自分の五感で感じ、改めて近距離で本物の台湾を観察し、いろいろなことを体験しまし

た。ぜひ帰国後、自分自身の台湾での「見聞を周りの友たちや家族に聞かせてみてください。台湾の飾らない素顔、そして台湾の素敵さを、是非より多くの日本人に知らせてください。

この20年間、スカラシップの受賞者たちは様々な分野で台湾と日本の重要な架け橋として活躍しています。このバトンは今、皆さんに引き継がれました。皆さんが今後、新しい発想で台日関係の明るい未来を切り開いて行かれることを、心より期待しております。





感情表現と論理性と

拓殖大学 顧問 渡辺 利夫

文章というのは不思議なものです。それまでの人生の過程で直面したさまざまな経験について、あれやこれや思いを巡らせてみても、その像はぼんやりしたものでしかないのですが、これを思い切って文章化してみますと、その文章の背後から連想が次々と浮かんで再現され、書き出す前には想像できなかったようなストーリーができていけます。

「人生量」という言葉はありませんが、私はあつてもいいと思うのです。一人の人間が生涯を通じてどのくらいの量の人生を送ったのか、この量はおそらくこの人間が一生の間どのくらいの量の感情を抱いたか、私はこの量が多い人ほどその人の人生は豊かなものだと思うのです。「人生量」が「感情量」によって測られるとすれば、それは文章化された感情表現量によってだと私は考えます。優れた作文の一つの条件は、感情表現の語彙が見事に構成されている文章だということです。

中学・高校生の部の山本旭隼君の作

文には、知り合いの台湾人のおじさんとの交流を感情豊かに描いて、本当に心温まるものを感じさせます。おじさんが台湾に帰る日、おじさんは山本君にこう伝え、山本君をジンとさせるシーンがあります。いいですね。

「自分で自分を臆病だと思えば消極的になつて人は寄つてこないし、活発だと思えば積極的になつて自然と周りに輪ができる。あなたの思い通りの自分を、ずっと思い浮かべなさい。それが積み重なつて、きつと理想の自分になるから。いつもに似合わない丁寧な口ぶりで、そうおじさんは添えて旅立つた。」

対照的に、大学生の部の永井光洋君の作文は、ずいぶんと論理的です。台湾の海洋教育が大変に系統的で組織的であることを学習と調査を通じて理解し、このことを論理的でしっかりと文章で描いていて感心させられました。若い人の文章に求められるのは、先に述べた感情表現を豊かにすることとかならず、文章を論理的に仕立てることだと、私は考えます。





高槻高校 1年
山本 旭隼

現代で絆はいかに必要か

この度は「日台文化交流 青少年スカラシップ」中学・高校生 の部におきまして、大賞に選出していただき心より感謝申し上げます。

タイトルにもあります通り、私が作文を通して伝えたいのは絆の大切さです。「日常」である学校を歩出した「知らない」世界の中心に、国籍も考えも全く違う人との絆が生きている、そういう美しい世界を想いながら筆を走らせました。

さて、本稿では、絆の大切さについて少し理屈立てながら述べていきたいと思えます。

紛争や気候変動など様々な問題が林立する現代、これらの解決につながるのには「物事を客観的に見る力」が必要です。なぜなら、先述の問題は各国にまたがる問題で、とても自己や自国と違った範囲で処理できるものではないからです。各国にまたがる問題であれば、その各国による連携が必要で、人種も考え方も違う外国と連携するには、相手の異なる考えを理解し相手の立場に立つて考えること、つまり客観的に考えることが必須になるのです。

主観と客観という二つの言葉はよく対義語として紹介されますが、私は客観も一つの主観だと思えます。人間は生来様々な人と出会って様々な本を読み、様々な考えを学びます(人の考えも本も主観で構成されている)。そうして得た知識の蓄積が、自分の能力や特性に影響されつつ「自分の考え」によって昇華されていきます。ですから、客観も誰かの主観の積み重ねだと言えます。ただし、客観は自分の特性や能力に影響された部分(明らかに自分特有である)の考え方の現れを、様々な人の主観を加えることによって極限まで薄めようとする点がポイントです。そして客観がより多様な主観で薄められていくと、それは物事を様々な視点で考える「力」になります。

そのため、客観的に見る力を得るには、様々な人に出会って様々な主観に触れなくてはなりません。人と会って得た経験は、自分のマインドセットの部になり残ります。そうして絆が残るからこそ、たとえ期一会の絆でも大事にしなければならぬのだと思います。



京都大学 3年
永井 光洋

「光る海とともに生きる」ということ

大変栄誉ある賞をいただき、身に余る光栄です。「第20回日台文化交流 青少年スカラシップ」に関わる全ての方々に、感謝申し上げます。

私は昨年の夏に、北極への研究航海に乗船しました。普段、図書館と自宅を往復するだけの生活を送っていた私にとって、船内で過ごす3週間はかけがえのない時間でした。特に印象深かったのは、自分を取り囲む青い海です。その壮大さに魅了された私は、これからも海に関わっていきたいと思うようになりました。

現在、海と教育を結び付けた「海洋教育」の研究を行っています。研究を進める中で、海洋教育の先駆者として台湾を意識するようになり、身になりました。台湾は、体系的な海洋教育政策を実施していることで知られています。それに加えて、学際的な視点で海を捉えた展示を行う、国立海洋科技博物館に興味を持った私は、初めての単身海外旅行で訪れました。カラフルなバスが行き交う中で、乗り場が分からず困っていた私に、手を差し伸べてくれた淑女の優しい笑顔を、今でも覚えていています。

台湾滞在中は、五月天の「人生海海」という曲をリピートしていました。「人生海海」とは、「人生とは、広大な海のような」という意味です。どこか懐かしさも感じるフォークソングのリズムに身をゆだねていると、目の前に碧海が浮かんできます。心地よいギターの音色に合わせて、「常常我閉上眼睛 聽到了海的呼吸」「目を閉じるといつも、海の呼吸が聞こえる」と語るこの曲は、台湾の人々と海つながりをよく表しているように思えます。さらに、こんなに辛いことがあっても、「我知道潮落之後一定有潮起」「潮が引いた後には、必ずまた潮が満ちる」というメッセージは、これからも私の背中を押してくれると確信しています。

この曲を聴きながら、青いバスの窓から見た、基隆の海のパラマを、僕は忘れません。台湾との縁を大切にしながら、これからも光る海とともに生きていきたいです。

優秀賞

東京都立桜修館
中等教育学校 5年
前田 碧生



日本と台湾への個人的な思いを綴った文章に、優秀賞という評価を与えて頂いたことに際し、大変光栄に思っています。今回の作文を書くきっかけとなった昨秋の台湾修学旅行は、日本と台湾の双方の深い理解の大切さと、それを自分の言葉で伝えることの難しさ

を痛感する経験となりました。「相互のつながりを学び、それらに馳せる思いを自分なりに表現する」ことを改めて研修旅行という形で実現できる機会に恵まれたことに、台湾との御縁を感じています。今後、日本と台湾のさらなる繁栄と友好の助となるるよう行動していきたいです。

日台を学ぶ、思う、伝える

優秀賞

滋賀県立草津東高校 2年
北村 芽依



この度は、優秀賞に選出していただき本当にありがとうございます。思いを込めた作文を評価していただけたことを、大変嬉しく思います。台湾を知ってから数年が経ち、私にとって知らない外国の一つだった台湾は、いちばん身近な国となりました。今回私は「競技かるた」を台湾で取る

選手について書きましたが、台湾と出会い、海に向こうでもかたるたを愛する人がいることを知れたことは、本当に幸運だったと思います。素敵な出会いに感謝し、優秀賞をいただいたこの経験を活かして、競技かるたを世界に広めていきたいです。未来の選手がかかるたに出会う機会を作れますように。

競技かるたを愛する台湾の仲間へ

優秀賞

横浜中華学院中学部 1年
宮川 心



日台スカラシップを受賞して取ったこと、本当に嬉しく思います。この作文を書いた理由は、まだ認められていない同性婚の存在があることを少しでも多くの方々に伝えたくったからです。この賞を取れたのは、手伝っていただいた先生方、そして書くきっかけをくれたお友達のおかげで

す。最後に、私をこの受賞に導いてくれた日台スカラシップの関係者の方にも感謝の言葉を伝えたいです。素晴らしい機会を与えてくれたこと、心から感謝しています。この受賞を励みにもっと、色々な作文のコンクールに参加してみようと思います。ありがとうございました。

日台スカラシップを受賞して

優秀賞

中央大学杉並高校 3年
牧野 莉乃



この度は日台文化交流 青少年スカラシップにおきまして優秀賞に選出していただきありがとうございます。このような名誉ある賞に受賞できたこと、誠に光栄に思います。私が台湾に興味を持つきっかけとなった思い出の木、パキラ。私と台湾を繋げるものは身近な所がありました。最近では近

所の桜が芽吹き始めそれを見る度に台湾に植えられた絆の桜を思い出します。木に込められた想いが台湾と日本の関係をより深め、私のパキラや絆の桜のように強く生きていくことを熱望しております。台湾のことをより深く知り、見つけた繋がりが大きな目標に繋がられるよう精神してまいります。

繋がり

優秀賞

福島県立ふたば
未来学園高校 2年
酒井 菜々子



この度は優秀賞という素晴らしい賞に選出していただき、大変嬉しく思っております。私と台湾との出会いは、フランスでの交換留学でした。国際化が進み、人や文化との出会いの方が大きく多様化するこの社会で、同じ東アジアの国出身である私たちはどこに

ても自然と繋がりをを感じるころがあるようです。今後、更なる国際化が訪れる時、私たちのこの「繋がり」は、さらに大切なものとなっていくでしょう。私の大切な友達と、台湾との繋がりに感謝し、これからも続く彼らの発展を強く願っています。

国際化する社会での日台交流

優秀賞

横浜中華学院高等部 1年
下田 隆聖



皆さんは「横浜中華街」と聞くとき何を思い浮かべますか。きつと美味しい料理や異国情緒溢れる雰囲気と答える人が多いと思います。それも大きな魅力ですが、その奥にはこの街を支える人々の日常があります。それは、震災、戦禍、コロナ禍を乗り越えて、祖先から先輩へ、先輩から私たちへ、途切れることな

く受け継がれてきました。私がやるべきこと、それはこの街を次世代へ繋いでいくことです。私もこの街を支える一員になりたい。そして、ともに支える人々の胃袋を幸せで満たしたい。祖父のように。そんな思いで書いた作文がこのような素晴らしい賞に選ばれて非常に嬉しく思います。

使命



5年振り復活!

台湾研修旅行5日間の旅路

狭き門を潜り抜けた8名の学生は5年振りに再開された台湾研修旅行に参加。通常の観光旅行ではなかなか出来ない体験、様々な出会いを通じて、大きな成長を見せた研修生たち。そんな短くも濃密な5日間をハイライトでご紹介。



教育部で台湾の教育の現状について、真剣に議論を交わす研修生たち

1・2日目

出会い&政府機関への研修

コロナ禍の影響もあり5年振りに実施した台湾研修旅行の参加者計8名は3月26日早朝東京大手町で一堂に会し、エバー航空で羽田空港を発った。初対面の中、年齢も異なり緊張した様子であったが、台北到着後の夕食で円卓を囲みながらのコミュニケーションで徐々に打ち解け始めた。

2日目は日本統治時代の名残が随所に見られる総統府を見学。その後、教育部国際兩岸教育司を表敬訪問。陳俞奴副参事らにお招き頂き、台湾の科学分野を含め多分野での教育水準の高さ、日台交流促進のための奨

学金制度の充実、原住民への教育支援などの説明を受けた。学生からは海洋教育の取り組みやアジアで初めて同性婚を合法化するなど

先進的なLGBTに関する取り組みについて多くの質問があり、活発な意見交換が行われた。午後には今回の研修のために特別開放して頂いたフランスパロック様式の優美な台北賓館を見学し、現地ガイド蔡さんの案内に学生達は耳を傾けた。続いて外交部へ表敬訪問し、日本文教事務科李蕙珊科長と姚品均薦任科員との質疑応答を通じて台湾外交の現状について理解を深めた。現在、台湾と正式に国

3日目

東呉大学訪問、十分と九份の観光

3日目は現地との学校交流として東呉大学を訪問。4人の日本語学科の在校生とキャンパスツアー、グループでの意見交流、食堂での昼食を通じて、学校生活の裏話を含めて和気あいあいと交流した。日本の漫画が図書室に多数置いてあるなど、日本との違いを学生達は感じたようだ。その後は、観光の定番である十分へ向かい、それぞれ



外交部で熱い議論の後の記念集合写真

交があるのは12か国しかなく国際的に弱い立場で外交上の難しさはあるが、自ら積極的に動くことで切り開くことも可能で、

思い思いの願いを天燈に書き、晴天の空へ打ち上げた。続いて「千と千尋の神隠し」の舞台とも言われている九份で、台湾スイーツの食べ歩きや特産物の買い物をするなど学生達



東呉大学の学生によるキャンパスツアー

それが仕事のやりがいでもあり、楽しさでもあると学生達に熱心に説明した。
夕食では、台湾在住作家の片倉佳史氏も同席し、台湾の歴史、文化、観光など様々なテーマをレクチャー。台湾史を学ぶことによって日本史に繋がり、更には世界史へと広がる。困っている人がいたら助けるといふ民族性も相まって台湾はとても面白く興味が尽きないといった話を伺った。研修旅行らしく政府機関の訪問を中心とした濃密な1日を過ごし、疲れた体をホテルで癒した。

は束の間のフリータイムを楽しみ、矢板明夫支局長を囲んで、台湾政治の話や新聞記者としてのエピソードを交えて楽しく会話した。現在のデジタル中心の時代では手間暇かけて取材されたニュースでもクリック数が稼げなければ評価されない一面もあるので、新聞メディアとしての難しさやリアルな現状を学生達に伝えた。



4・5日目

台南へ。学校交流、ホームステイそして旅立ち

4日目は、日本の新幹線の車両技術を導入した台湾高速鉄道に乗車。台北駅から嘉義駅への約90分間の移動で、日本の技術力の高さと日台の繋がりを改めて感じながら楽しんだ。到着後、台南特

の銅像を見学。お花が手向けられているなど現地の人々に大切にされている様子が垣間見られた。100年以上前の日本人の功績により、現在の日台友好へと連続と続いていることを実感

した瞬間でもあった。その後、2回目の現地の学



記念館で八田技師の功績を辿る



一緒に踊れば言葉の壁も関係なし!

校交流として、創立100周年を迎えた国立台南家齊高級中等学校へ訪問。陳韻如校長を中心に先生、生徒から熱烈的な歓迎を受けた。同校は先日、参加者の在籍する福島県の高校へ訪問したこともあり、今回の交流で奇跡的な再会を果たす一幕もあった。在校生による歓迎セレモニーを経てスマホを使ったクイズ大会、キッシュのベーキング体験、台湾舞踊のデモや体験など短時間にイベントが目白押しで台南の学生のエネルギーに圧倒されつつも、アニメ、芸能の話



すっかり仲良くなった仲間たち
(台湾高速鉄道の車両にて)

題を中心に話の花を咲かせた。そして今回の旅行のメインイベントの一つであるホームステイで学生たちは各家庭ごとに分かれて宿泊。アウトレットや夜市へ向かうなど、旅行最後の夜を台湾の温かい家庭に囲まれながらそれぞれ素敵な一夜を過ごした。

最終日は台湾高速鉄道で再び台北へ戻り、お茶の体験、お土産を買い、松山空港から帰国の空へ飛び立った。今回の研修旅行で5日間と短い期間ではあったが、学生たちも『台湾』という共通のテーマの下に悠久の時を過ごしたような仲間意識が芽生え、研修で学んだ日台の歴史や日台友好の未来を胸に、名残惜しそうちに最終地である東京駅を後にした。

スケジュール

3月26日(火)

- 羽田空港発 → 台北 (松山空港) へ
- 中正紀念堂 (衛兵交代式) 見学

3月27日(水)

- 總統府見学
- 教育部表敬訪問
- 台北賓館見学
- 外交部・台湾日本関係協会表敬訪問
- 台湾在住作家片倉佳史氏と夕食&交流

3月28日(木)

- 東呉大学訪問&学生と交流
- 十分/九份の観光
- 産経新聞矢板明夫台北支局長と夕食&交流

3月29日(金)

- 台湾高速鉄道で嘉義駅へ
- 烏山頭ダム、八田與一記念館見学
- 国立台南家齊高級中等学校訪問
歓迎式~学校紹介~授業体験など
- ホストファミリーと合流、ホームステイ先へ宿泊

3月30日(土)

- 台湾高速鉄道で台北駅へ
- 台北 (松山空港) 発 → 羽田空港着
- 解散

学び、楽しみ、絆が生まれた5日間 ～世界へ羽ばたく第一歩

高槻高校 2年 山本 旭隼



九份の書道用具店で購入の筆とともに

多様な価値観にさらされて

貴重な体験の連続だった。諸官庁への表敬訪問や学校訪問、そしてホームステイ。これらの行程は、通常の旅行では体験できないものばかりである。どれも印象深い思い出ばかりだが、ここでは主に二つの体験について述べていく。

外交部への表敬

訪問では、二名の外交官の方と直接お話しすることができた。立派な会議室が用意されて丁寧に整えられた場に、背筋が伸びる思いがしたのを覚えている。ここでは官僚として働く上でのマインドセットややりがいなど、生の声を聞くことができ、国を思いあらゆる世代への責任感を礎に任務を果たす外交官のたくましい姿に憧れを感じた。彼らの職業は私の将来の夢とも共通する面があったため、実際に深く関わることは私にとっても貴重だった。

人生初のホームステイは、現地の生活や慣習を肌で感じるのに絶好だった。夕食後には現地の寺院をいくつも回り、そこに根付いたお参りの作法を何度も教わった。異



夕食後にホストファミリーと団らん

文化を知るには、ホームステイは最適だ。普通の旅行であれば、私は日本人の価値観のまま海外を見ることになるだろう。しかし、ホームステイの特長は、現地人の価値観のまま地元で暮らす感覚でいられることである。それによつて初めて相互理解が深まり、異なる価値観を受け入れ尊重



台北・金品茶楼で本格中華料理を堪能

今回の研修旅行で、絆の尊さを再認識した。他の参加者の方々ははじめ、ホストファミリーのみならず九份の書道用具店の店員さん…。現地では数えきれないほどの方々にお世話になった。出会った方々との思い出はすべて、鮮明に心に残っている。たとえばそれが一期一会の出会いでも、決して軽い絆ではない。

とても新鮮で感動した。競争社会に身を置いていると、周りは皆とにかく自分優位を作りたがる。そのような状況の中で、私は次第に「自分」にいるとは何なのか分からなくなっていた。そういった意味で今回の旅行で周りの方々に恵まれたのはとても幸運であったし、絆という心の居場所ができたのも良いことだった。それに皆、広い視野を持っていた。世界を肌で感じて生きたことがある方々だからこそ、広い視野で自分を客観視し真の自分のあり方を知ることができるのだろう。その日一日その瞬間に真摯に向き合っている皆の姿勢には、ただ尊敬の念しか生まれない。

ここまで学びと楽しみにあふれた5日間は、間違いなく初めてだった。そして、この旅行のすべてが宝物だ。この体験と絆を決して忘れず、今後も日台友好のために歩んでいきたいと強く感じている。

未来に続く新たな絆〜一生の宝物

する姿勢が得られるのだと思う。ホームステイ先の方とはその後にも連絡を取り合っている。国を越えた絆があるのは、グローバル化が進む現代ならではの。本当に奇跡で素晴らしいことだと思う。



台北賓館で日本時代を感じる

つながりを理解すること

京都大学 3年 永井 光洋



漠然とした「台湾」からの脱却

日本ではすぐに捨ててしまっ「コンビ」のレシートまで、お土産になる旅だった。7人の中高生との研修旅行。大学生の私は馴染めるか不安であったが、最終日には寂寥感を覚えるほど、充実した日々となった。

私は渡航前、「台湾 3月 服装」とインターネットで検索して、その情報を参考に荷造りを行った。しかし、実際に現地に赴いてみると、台北と台南では、気温が全く違うことが分かった。台北では快適だった長袖シャツにジャケットというコーディネートでは、台南の暑さには対応できなかったのだ。ここで私は、「台湾 3月 服装」という検索の不足さを痛感した。このような実感は、現地に赴かない限り、案外得られないのではないだろうか。やや論理は飛躍するかもしれないが、ここで私は、「台湾は○○だ」とか、「台湾の人々は○○だ」とひとくくりに



台湾の南北を結ぶ高速鉄道

頭ダムを建設させた。東洋一のダムを完成させた八田は、地元では神格化されており、銅像も建てられている。しかし、彼の最期は悲劇的なものであった。1942年、拓務省の命令に従い、徴用船にてフィリピンに向かう

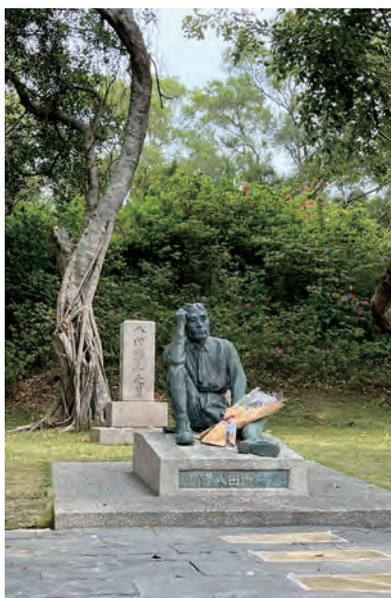
して語る危険性に気が付いた。もちろん、台湾は日本より南に位置しているの、相対的に気温が高いことは確かであるように、ある程度同じ背景を共有する台湾の人々においても、なんらかの傾向を読み取ることは一定の範囲内において可能

八田與一という物語を考える

研修旅行で特に印象深かったのは、4日目に訪問した烏山頭ダムだ。烏山頭ダムは、台湾を日本が植民地支配していた1930年に完成した台南市のダムである。台南市が位置する嘉南平原は当時、農作物が育たない不毛の地であった。嘉南平原が日本の食糧供給源となることを目指した台湾総督府は、石川県出身の水利技術者である八田與一を嘉南平原に派遣して烏山

なのかもしれない。しかし、同じ台湾でも、地域によって気温が異なるように、一人ひとりが異なった考えを持っているはずだ。このことを捨象して、台湾という大きな主語を扱うことはできない。今回の研修旅行は、「複雑なものを複雑なまま理解する」重要性を理解するきっかけとなった。

ことになった八田は、その途中で米軍の潜水艦による雷撃を受け、殉職した。八田與一の妻である外代樹も、敗戦後取り乱すようになり、夫の遺産であるダムの放水口に身を投げて自殺を図った。彼らの生涯には日清戦争や太平洋戦争が大きく関わっている。もしかすると、八田與一が生きた物語を考えることは、私



烏山頭ダムを築いた八田與一の銅像



外代樹が身を投げた放水口

たちに「戦争とは何か」や「日本と台湾のつながりとは何か」という本質的な問いを提供してくれるかもしれない。私たちが松山空港を離陸した4日後の4月3日、台湾の東部沖でマグニチュード7.2の地震が発生した。被害を受けた方々へお見舞い申し上げ、本稿の筆を置くことにしたい。

台湾で学んだこと・感じたこと。

横浜中華学院中学部 1年 宮川 心



ランタンあげの様子(写真右が私)

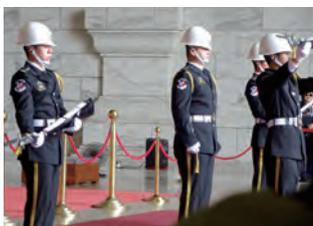
中正紀念堂

今回の研修旅行の二日目に、私たちは中正紀念堂へ訪れた。バスを降りてすぐに私達を出迎えたのは、白い門だった。門をくぐったあと、私の目に写ったのは紫色の屋根の建物だった。中に入る途中、旅行のガイドさんが中正紀念堂について説明してくれました。中正紀念堂は、第二次世界大戦中の連合国中国戦区最高司令官であり、27年の期間にわたって中華民国

総統を務めた蒋介石さんを表彰するために建てられました。1980年に完成してから、常に台湾国内外の観光客でにぎわっていて、台北で必ず行きたい場所のひとつとなっているそうだ。中に入ると、そこには微笑みながら椅子に座っている蒋介石さんの銅像があった。高さは六メートルと少し。銅像の上には左から順に科学・民主・倫理の三つについての文章が書かれ



中正紀念堂の銅像



衛兵交代式

ていた。私が銅像に呆気に取られていると、突然対面の方から地を踏む大きな音と共に、衛兵交代式が始まった。床を強く踏んで足音を立てたり、音を無くして歩いたり。不規則な拍子を聞いていたらいつのまにか、カメラを構えている自分がいた。カメラ越しに見える衛兵交代式を見た時、とても美しいと思った。衛兵交代式を見終わって外に出ると、下に続く長い二つの階段と、その先にオレンジ色の屋根をした寺のような二つの建物が向き合っていた。この階段はどれも89段あって蒋介石さんがお亡くなりになられた年に合わせているそうだ。



中正紀念堂

講演会

2日目の夜、私達は夕食をとりながら台湾在住の片倉佳史氏による講演を聞いた。私は作文で同性婚についてのことを書いた為、片倉さんに同性婚について聞いた。片倉さんはこう答えた。台湾に住んでる人たちは、みんな他人を尊重す

十分・九份

3日目は、十分、九份を観光した。まず最初に十分で天燈をあげた。なぜ天燈を空に飛ばすかと言うと、

台湾に住んでいる人々は多種多様な宗教を信仰している、天の上には神様がいて、天から天が一番強いと言う風習があり、空に天燈をあげると神様に直接願いが届いて、願いが叶うと言う迷信があるそうだ。台湾の他の



九份の景色

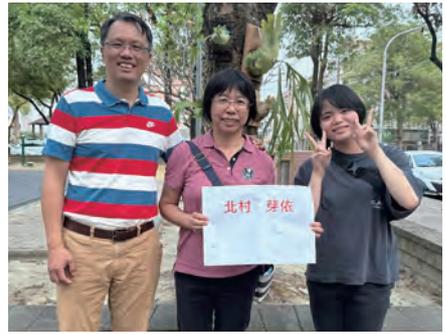
地域では、昔山賊がいて、お互いの安否確認をする為にランタンを飛ばしていた伝統もあるそうだ。十分で観光をし終え、バスに乗って九份に向かった。長い階段を登った先には美しい風景が広がっていた、山のすく下に海が広がっていてとても美しい風景だった。九份はジブリ作品の「千と千尋の神隠し」のモデルとなった観光地で、そこには赤色のランタンが幾つも垂れ下がっていた。

感じたこと

私は今回の研修旅行を経て、もっとも台湾について知りたい、色んな歴史に触れてみたいと思った。地理的にも、歴史的にも身近な国台湾、何度も訪れたはずなのに知らないことの方が多かった。私は次に台湾へ行く時、台湾についてもっと勉強して、いろんなことを学びたいと思う。

歴史、人、風景。 「台湾」を全身に浴びた5日間

滋賀県立草津東高校 2年 北村 芽依



温かく迎えてくれたホストファミリーと私(写真右)

唯一無二の仲間、そして台湾の人々の温かさ

この日台文化交流 青少年スカラシップが無ければ出会わなかった、全国から集まった8人の仲間。研修旅行初日は、緊張でほとんど会話がありませんでした。しかし1度話せば、皆それぞれ確かな志を持ってこの研修に臨んだ、心優しい人達でした。他愛のない会話を重ねながら、たつた5

日とは思えない絆が生まれたことを本当に嬉しく思います。訪問させていただいた東呉大学や家齊高校で、出迎えてくれた学生さん達。目を輝かせながら迎えてくれた彼らからは、「台湾最良の風景是人」の真髓を感じました。本当に温



数日間を共にして、仲良くなった大好きな研修生仲間

かく、まるで家族のようでした。私たちが教室に入った時の彼らの笑顔、私は一生忘れないでしょう。そして、一晩私を受け入れてくれたホストファミリー。私は拙い中国語しか話せませんでしたが、私が必要に理解しようとしてくれました。たとえ言葉が上手く通じなくても、互いを思う気持ちがあれば通じ合えることを知りました。人の温かさを感じ続けた5日間でした。今回の研修旅行で、沢山の人と出会えたご縁に感謝します。

顔を、私は一生忘れないでしょう。そして、一晩私を受け入れてくれたホストファミリー。私は拙い中国語しか話せませんでしたが、私が必要に理解しようとしてくれました。たとえ言葉が上手く通じなくても、互いを思う気持ちがあれば通じ合えることを知りました。人の温かさを感じ続けた5日間でした。今回の研修旅行で、沢山の人と出会えたご縁に感謝します。



笑顔でダンスの紹介をしてくれた家齊高校の生徒さんたち

顔を、私は一生忘れないでしょう。そして、一晩私を受け入れてくれたホストファミリー。私は拙い中国語しか話せませんでしたが、私が必要に理解しようとしてくれました。たとえ言葉が上手く通じなくても、互いを思う気持ちがあれば通じ合えることを知りました。人の温かさを感じ続けた5日間でした。今回の研修旅行で、沢山の人と出会えたご縁に感謝します。



原住民族の衣装や小物(総統府にて撮影)

ことを知ったのです。1937年より、台湾における国民意識の向上のため皇民化運動がされました。その中に、国語運動と呼ばれる、日本語を台湾の家庭で使わせることを目的とした運動がありました。この時に台湾語や原住民族が抑圧されたため、文化を尊重し保護するという観点では非常に良くない行為と言えます。しかしこれにより、原住民族間の争いが減ったのです。異なる言語を話すそれぞれの原住民族が、日本語を共通の言語としてコミュニケーションが取れるようになったという点で、もちろん日本のしたことが良いことではあるとは言い切れませんが、物事は、観点によって見え方が全く違い、周りから見ただけでは当事者の感じ方は分からないものです。自分の視野の狭さを痛感しました。

1895年、日清戦争後に台湾は日本に割譲され、1945年まで日本の統治下となりました。この出来事について、私は、日本が台湾の文化を蔑ろにし無理な統治を行ったのだと認識していました。もちろん、そのような背景もあるでしょう。ですが、片倉さんのお話をお聞きし、私はそれにメリットもあつた

日本統治による本当の影響を知る



様々な原住民族の言葉で示された「手」の発音(総統府にて撮影)

学び、伝えた 貴重な日々を振り返って

東京都立桜修館中等教育学校 5年 前田 碧生

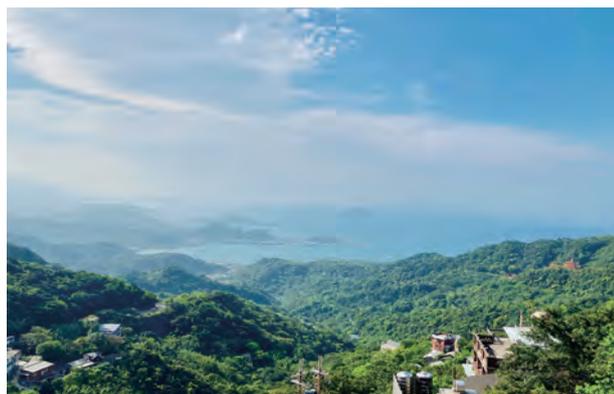


ホストファミリーの皆さんと私(写真右端)

「強い信頼」が結びつけた日本と台湾

まず、本稿執筆中に台湾東部を震源とする地震が発生したとの報道を耳にしました。心よりお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復興を心から祈念しております。

さて、今回の台湾研修旅行は、非常に美りあるものとなりました。政



九份展望台から美しい自然を望んで



台北101の麓から

府機関への表敬訪問をはじめ、東吳大学や国立台南家齊高校の学生との交流といった貴重な経験を通じて、自身の視野を広げることが出来る日々でした。

この五日間で強く感じたのは、台湾と日本の友好関係の礎に長きに渡って育まれてきた「強い信頼」が存在しているということ

です。台北賓館や烏山頭ダムの見学では、かつて日本人が仕事として建築に取り組んだ建造物が、今なお大切に利用されていることを学びました。またホームステイでは、「弁当」をはじめ様々な日本語が台湾語の中に取り入れられていることを知りました。これらの背景には、日台関係を構築してきた多くの人々の努力によって得られた信頼によるものが大きいと、ガイドの方から伺いました。先人たちが台湾の文化や地理を受け入れながらも台湾の振興に努め、台湾の人々の信頼を得てきたからこそ、今なお台湾の社会の中に日本由来のものが受け入れられ続けているのだと改めて気が

付きました。日台関係の一層の繁栄を願う上で、様々な分野において双方の違いを尊重しながらも共に不断の努力により信頼関係を構築することが大切なのだと思います。

濃密な五日間の御縁に感謝して

台湾研修旅行の五日間、多くの方々とお会いする機会に恵まれました。作文の中で「台湾への思いを自分の言葉で伝えること」の大切さを書いた身として、コミュニケーションを通じて相互理解を積極的に実現できたことは有意義な経験となりました。



五日間本当にお世話になりました。下田くん。五
日間本当にお世話になりました。

外交部や教育部においては台湾の実情を詳細に説明していただいただけでなく、疑問に對しても的確にお答えしていただき、より台湾について深く理解をすることが出来ました。特に多文化共生社会を実現する上での教育や生活保障の重要性についての説明は興味深く、関心が深まったように感じています。また、ホストファミリーの方々とは一泊ではありましたが親睦を深めることが出来ました。互いのことを話したり台湾のローカ



歴史を見守る
烏山頭ダム旧放水口

ルライフを垣間見たりしたことは稀有な経験であり、また、ホストブラザーが日本語を独学で習得している姿には驚かされました。そして、研修旅行参加者の方々は、台湾を学ぶ同じ学生同士として互いに刺激を与えながら交流を深める仲間となりました。台湾との向き合い方や各々の将来について語り合った時間は何にも代えがたく、自分の価値観を広げる機会となり、これからの人生において大きな財産になっていくと確信しています。

私は、この台湾研修旅行を通じて自身の成長を実感するだけでなく、日台関係の更なる進展に貢献したいという思いを深めることが出来ました。このような御縁を作っていたいただいた主催者さまをはじめ、すべての関係者の方々に深く感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

未知との遭遇 — その先に待っていたもの 更に先に待っているであろうもの —

横浜中華学院高等部 1年 下田 隆聖



8 / 375



375人から選ばれた8人

「友達って、ごつやつて作るんだろ。台北の空港から途中合流だった私は正解のない問いの答えをただひたすらに探していた。」

皆がぞろぞろと到着ロビーから出てきた。幸いまだお互いに打ち解けてはいなさそうだった。無言で空港を出てバスに乗り込む。スーツケースを引く音だけが響く。最初のバスほど気まずいものはなかった。本来であれば横2列の縦4列で収まるはずの人数が、1人1人孤島のように座っていく。

バスに揺られ、ホテルへ送られ、部屋へ案内される。2人1部屋だ。5日も共に夜を過ごすなら仲良くするしかない。そう覚悟していた

学び、夢、そして未来。

が、気がついた頃には仲良くなっていた。どうやったかは覚えていない。そこからは早かった。夕食会場へのバスでは全員ルームメイトと2人で並んで座り、次の日の朝食になる

私は、今回の研修旅行で台湾の「料理」について学びたいと思っていた。台湾で生まれ育った祖父が食べていたのはどんなものだったのか。本場の料理はどんな味がするのか。とても楽しみだった。

そんな中で一番印象に残っている一皿が、高雄の夜市で食べた「蝦仁煎」だ。夜市は4日目のホームステイの夜にホストファミリーが連れて行ってくれた。台湾の牡蠣と聞いて、少し躊躇している。ホストブラザーが「エビもあるよ。」と教えてくれ、食べてみる



おいしかった蝦仁煎

台南の夜市での一枚

と男子4人で食卓を囲んだ。その夜はゲームをし、更に次の日の夜は男女関係なく全員で夜遅くまで沢山面白い話をした。

出会って5日しか経っていないのに、もう5年も、いやもっと一緒にいるような感覚がする。どうしてだろ

ことにした。祖父もよく蚵仔煎を作るので大体の味は想像できた。緩めの生地に目玉焼きが乗っていて上に甘酸っぱいソースがかかっている。これまで私はこの甘酸っぱいソースがなんとも

言えず、好きになれなかった。しかし、蝦仁煎は台湾の屋台料理の名物であり、今後の勉強のために挑戦してみようと思いつきながら一口食べてみると、甘かった。私が苦手な酸っぱさが全然なく、いくらでも食べられる気がした。

この研修旅行では、北から南まで様々な地域の料理を食べる機会に恵まれた。そして、そのどれもが

う。答えはきつと、誰にもわからない。受賞できてよかった。みんなに出逢えてよかった。この絆はどれだけ時が流れようと決して壊れないだろう。そして、いつの日か共に支え合えたら、これほど素晴らしいことはないだろう。



ホストファミリーと

美味しかったが、決して同じ物、同じ味の料理は無かった。今回衝撃を受けた蝦仁煎も、きつと山を越えた台東とでは味が違うし、台北とも全然違うだろう。だからこそ、この国で料理の勉強がしたい、そんな思いが一層強くなった。

私は将来、台湾で料理の勉強をし、各地のレストランで働くことでさらに研究を深め、それを自分の街、横浜中華街に持ち帰り広めたいと考えている。そして、いつか私が学んだ料理を食べて、美味しいと微笑んでくれる人がいれば、ほかの何よりも嬉しい。

台湾で得た視点。 進み続けるわたしたち。

福島県立ふたば未来学園高校 2年 酒井 菜々子



教育部の方と再会(写真右が私)。とても歓迎していただきました

過去にも未来にも正解はないから

台湾での約五日間は、忘れられないものとなりました。

今回の研修では、全体的に台湾の歴史について学ぶ機会がとても多くありました。私は台湾に行ったことがなく、また知識も歴史の授業で学んだ程度だったため、初めて知ることの連続でした。台湾の原住民をはじめとする独自の文化や技術から、日本をはじめとする諸外国との関わりまで、400年という歴史の重みを感じました。

特に印象的だったのは中正紀念堂です。一時間に一度行われる衛兵交代式を見学しました。建物は隅々まで美しく、そして衛兵の一糸乱れぬ動きには感動しました。帰国後、さらに歴史について知りたいと思い改めて紀念堂について調べたところ、「この式や建物をめぐって論争があったことを知りまし

た。」自由で開かれた台湾では、蔣介石に代表される権威主義の時代と決別するべきだ」という考えのもと、蔣介石を讃えるこの建物や式について疑問を呈する人がいるとのことでした。この問題は自国の歴史について、台湾がどうとらえているのかを世界に表明することと同義だと考えま

す。歴史に正解がないように、これからの私たちの選択にも正解はありません。台湾の歴史だけでなく、これからについても大きな興味が生まれました。

国際化する世界を感じた旅

また、外交部と教育部、二つの学校にも訪問しました。外交部では、日本と台湾の政治的な関わりについて知るとともに、外交官という憧れの職業について直接お話をいただくことができ、大変勉強になりました。東吳大学では、日本語文学科の皆さんと交流し、学校見学や食事を通して学校や台湾への理解と親睦を深め、「この学校に行きたい」と思うようになりました。



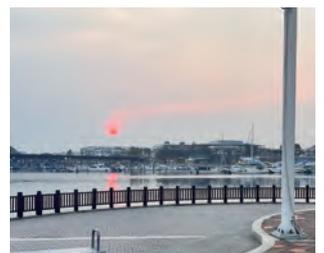
ずっと憧れていた九份は、まさにノスタルジックで素敵な街並みでした。蒸し暑さと人ごみに揉まれたのも良い思い出です



十分では受験生らしく、学業成就(と縁結び)を祈願しました

教育部と家齊中等教育学校では、一月ほど前に私の学校にお越しくださった方々と偶然再会することができ、再び感謝を伝えるとともに台湾が大好きだと伝えることができました。

これらの全体を通して驚いたのは、台湾の人々の外国語の堪能さです。私は英語でコミュニケーションをとるといふことに関してある程度の自信がありますが、交流した中学生の皆さんの英語を話し続ける姿に憧れの気持ちを持ちました。台湾の皆さんは英語も日本語も上手に話せる方が多いように思っています。そして、文法や言葉が間違ついても話しかけてくれて、「あなたとコミュニケーションをとりたい」という気持ちの表れのように感じ、とても嬉しかったのと同時に、わたしたちも見習わなければならないと思いました。



ホストファミリーとドライブした海岸の夕日は忘れられません

A1などの技術が発達し、「外国語を学ぶ必要はない」と言われることも多くなりました。ですが外国の人とコミュニケーションをとれる自分の嬉しさ、外国の人が自分の言葉を学んでくれているという誇りと嬉しさは、A1には再現できません。私はやっぱり、外国語を学びたいと強く思いました。

このあつという間だった旅で、おいしい料理や各所への訪問を通して、台湾への知見を大きく深めたとともに、「一緒に過ごしたメンバー、あたたかく迎えてくださった台湾のみなさんから自分の今や将来について見つめなおす機会を多くいただきました。改めて、このような機会に恵まれたことに深く感謝します。



ご飯はどれも美味しかったのですが、多すぎて毎回苦しかった記憶が。それでもたくさん食べてしまいました

私たちが繋ぐもの

中央大学杉並高校 3年 牧野 莉乃



八田技師記念室前にて記念撮影

て学んだ。灌漑システムだけでなく、農業の方法までも功績を残した人物。しかしながら丘の上に建てられた八田與一像は私達がよく見る堂々とした銅像とは違い、考え込むようにダムの方を眺め座り込んでいた。今でもこの像には花束と水が添えられている。この地に住む人々の生活を大きく変えるほどの功績を残した人物でありながらも謙虚で周りを思いやる人物。そこに彼が台湾の人々に今でも愛され続ける理由があるのだと感じた。

鳥山頭風景区にはシャンゼリゼ通り以外の場所でも沢山の南洋桜が爛漫に咲き誇っていた。八田與一公園内に植えられた桜は「日台友好・絆の桜」プロジェクトの際、伊豆の河津桜を台湾産の桜につなぎしたものであり周りの南洋桜とは違う雰囲気を感じ出している。八田與一記念公園に入った瞬間、日本の風を二気に感じた。台湾の少し湿った暖かい空気の中にいるのに見渡す限り日本の春の景色が続き懐かしい気持ちになる。この桜を見るだけで台湾と日本が深く結びついていることを実感した。

台湾に住む人々の性格について。「台湾の人々は困っている人がいたらその人がどんな人であろうと全力でその人の悩みに答えようとしてくれる、手を差し伸べてくれる。」と台湾に行く前から耳にしていた。実際台湾に行ってみて台湾に住む多くの人々からもそれを直に感じた。国立臺南家齊高級中學に訪問した際に交流した方と今でも連絡を取っている。彼女は私が中学校での生活のことを尋ねた際、日本語で沢山のことを詳しく教えてくれた。彼女はダンスが専門課程であり毎日少なくとも2クラス、時には5クラスも授業があり、授業後も



国立臺南家齊高級中學での交流会

切れない深い絆を感じることができた。何十年先もあの桜が春に蕾をつけ続けられるように。これから先自分になにができるかを考えさせられるとても濃い研修だった。



十分にてランタン上げ

繋ぐ桜

4日目に台北から新幹線で嘉義に移動し、鳥山頭ダムと八田與一記念館に訪問した。嘉南平野は不毛の大地と呼ばれるほど早魃に悩まされていた土地である。そこに当時東洋一のダム、鳥山頭ダムを建設し、不毛の大地を大穀倉地帯に変えた人物。それが八田與一なのだ。台湾では地震が頻繁に起こることを考慮した八田與一は当時アジア初であった「セミ・ハイドロフィル工法」を採用したり、1年目は稲、2年目はサトウキビ、3年目は雑穀類を栽培する「3年輪作法」を提唱したことを八田技師記念室に



八田與一記念公園にて「絆の桜」

国を超えた出会い

残つて練習をするそつだ。本番に向けて何度も改良を加えて誰もが感動する作品を作り上げる。訪問した際は獅子舞と扇子舞を体験させていただいた。私自身高校でダンス部に所属していたこともあり、鮮やかで華麗な現地の舞踊にとっても興味があった。

5日間という僅かな時間ではあったが、台湾の方々の優しさに触れ、国を超えて自分と同じことを学ぶ方にも出会うことができた。何より沢山の場所に行き日本と台湾の契つても契り



十分にてランタン作り



世界につながる心の絆

～台湾に学ぶ

高槻高校 1年 山本 旭隼



外に出たいと思う年頃になった。

私は小さい頃からずっと内気な性格で、あまり外へ出たがらなかつた。そんな私の考えが変わったのは、私が中学校に入ってからだった。学校帰りに近くの本屋で目当ての本を買い、そそくさと立ち去ろうとしたそのとき、私は突然後ろから「なあ君と声をかけられた。「台湾、興味あるんか？」私はその日、歴史の授業で習った明治以降の日台関係について詳しく知るべく、本を購入していたのだ。私が是とも否とも言わないでいるうちに、本屋のおじさんは茶を淹れて私に勧めてきた。おじさんは台湾、台南の出身だった。二十歳のときに大阪へ出てきて工場勤務を始め、十五年前に結婚をしてこの本屋を立ち上げたのだと言った。おじさんは話の非常に上手い人だった。彼は、自分は台湾の生まれやけど、大阪に来てから二度も意思疎通で困ったことはあらへんのや、と流暢な関西弁を飛ばして笑った。そしておじさんは最後に、これから3日に1度来るといい、色々なことを教えてやる、と誘ってくれた。

それからというもの、私は誘い出されたかのように何度もおじさんの元へ寄った。おじさんは、「大阪と台南は仲のええ兄弟みたいなもんや」とよく口にした。彼によると、

大阪と台南はどちらも豊かな水運を基軸に発達した港湾都市で、商業の街として長年栄えてきたのだという。実際に、大阪は多くの川や運河をもつために「水都」という美称を持ち、台南では清の時代に五条港とよばれる本の水路が流れ、大陸との間で盛んに交易が行われていた。常に外の人間との関わりがあつたからこそ、庶民の間に開放的な気立てが育つたのだ。おじさんは、海があるとか国が違うとかは関係あらへん、俺らはみんな友達なんや、閉じとつたら福が逃げてく、人間開いてなあかん、と言つてまた笑った。どうやら、かつて見ず知らずの私に声をかけたのも、このおじさん特有の気風が関係しているようだった。

おじさんは、不意に歌を口ずさみ始めるときがあつた。彼はそれを、自分が若い頃によく聞いた歌や、と紹介してくれた。その歌の名は、「台南進行曲」といい、大阪の「道頓堀進行曲」という曲のメロディーに台湾語の歌詞をつけたものだった。道頓堀の血を引きつつ台湾の血も流れよるええ歌や、これこそ兄弟の証やがな、とおじさんは懐かしそうに微笑んだ。

私はおじさんから色々なことを学んだ。台湾の歴史はもろろのこと、台湾語や伝統行事のことな

どを私が足を運ぶ度に聞かせてくれた。しかし、彼はそれらを説明するのに、「兄弟」や「友人」という言葉を使わないことはなかつた。そしてそれは、台南と大阪だけではなく、世界中みんなが兄弟であり友人であるべきだ、という趣旨を示すようだった。

そうこうしているうちに、おじさんは急な事情で台湾に長期戻らなければならなくなつた。その時、最後の別れかのように神妙な顔をしたおじさんが贈ってくれた言葉を、私は今でも忘れられない。

「我們怎麼想、決定自己成爲什麼樣的人。」

（人は、自ら思い描いたとおりの自分になる。）

あなたは初めにここに来たとき、とても臆病な顔をしていたね。でも、今は違う。顔が夢で溢れとる。自分で自分を臆病だと思えば消極的になつて人は寄つてこないし、活発だと思えば積極的になつて自然と周りに輪ができる。あなたの思い通りの自分を、ずっと思い浮かべなさい。それが積み重なつて、きつと理想の自分になるから。いつもに似合わない丁寧な口ぶりで、そうおじさんは添えて旅立つた。

先月、私の学校で英語の授業の一環としてオンラインでの台日交流が行われた。日本と台湾は互い

に英語を母語としないため、意思疎通が上手くできるか不安が大きかつた。しかし、交流が終わつた後私のスマートフォンにはたくさん私の連絡が入つていた。それは、その日の交流で関わつた台湾の高校生からのメッセージであつた。そして彼らは口をそろえて、私と友達になりたいと言つた。私は自分の新たな姿勢が認められたように感じて、胸がいつぱいになつた。その後、台湾の高校生の皆とは一氣に仲が深まり、定期的に電話をしては情報交換などをしている。もちろん文化や考え方の大きな違いを感じることはたくさんある。しかし、それを恐れ怖気付く必要は全くない。私たちは皆兄弟であるし友人なのだ。

私は今まで、一度も日本を出て外国へ行ったことがない。かつては外に出たがらなかつた私は、自分でも驚くほどに変化し、胸は外へ行きたいという衝動で満ちあふれている。おじさん、ようやく理想の自分になれそうです。成長した今、海を隔てた台湾の地にも、この声が届きそうな気がする。

【参考文献】

大洞敦史(2018)「大阪人と台南人、なぜ似ている?」引かれ合う日台の古都交流(2018年12月9日付「nippon.com」)
(<https://www.nippon.com/ja/column/g00623/?num=2>) (2023年1月11日検索)



台湾と海洋教育

— 光る海とともに生きる —

京都大学 3年 永井 光洋



「光る海とともに、生きていく。」北緯70度。北極への研究航海に乗船した僕は、甲板から見える景色に心奪われた。果てしない碧海と、美しくも脆い海水。このパノラマを見た時、海とともに生きている実感が湧いてきた。僕は教育学を専攻する、大学3年生だ。北極で得たこの感覚と、教育の専門知識。この二つを融合させて、海と教育を結び架け橋になりたい。そう思うようになった僕は、海に焦点を当てた学びである「海洋教育」という分野に興味を持つようになった。

とめた「Ocean Literacy for All : A Toolkit」を刊行している。その10年も前から、台湾では海洋リテラシーが重視されてきたのだ。

海洋教育の事例を調査していくと、台湾に学ぶべき点が多いことが分かった。「美麗島」の名でも知られる台湾では、系統的かつ組織的な海洋教育が行われている。2007年に教育部(日本の文部科学省に相当する)が発表した「海洋教育政策白皮書」では、「提升全民海洋素養」(すべての人々における海洋リテラシーの向上)が目標に設定され、海洋教育の重要性が示された。海洋リテラシーとは、水産業や海運業などに携わる職業人となるために必要な専門知識ではなく、すべての人々が普遍的に学ぶべき、海に関する一般教養である。2007年には、UNESCOが海洋リテラシーを育む教育事例をまとめた「Ocean Literacy for All

」を刊行している。その10年も前から、台湾では海洋リテラシーが重視されてきたのだ。

この理念に基づいて、台湾では海洋教育が推進されている。第一に、小学校、中学校、高等学校のそれぞれで使用される教科書には、海に関する内容が組み込まれている。驚くべきことに、この組み込みは、全教科、全出版社で行われているのだ。このような系統的な海洋教育カリキュラムは、日本では見られないものだ。第二に、台湾には海洋教育施設が多く存在している。各地域には、海洋教育資源センターが20以上建設された。そこでは、地域独自の海洋教育プログラムの作成や、高い専門性をもつ教員の育成が行われている。加えて、これらのセンターを統括するために、国立台湾海洋大学に台湾海洋教育センターが設置された。このような組織的な教育センターの設置も、日本では行われていない。ノート面でも、ハード面でも、台湾では海洋リテラシーを育む環境が、日本に先んじて整備されつつあるのだ。

さらに特徴的なのは、台湾の博物館だ。普通、海に関する博物館と

いう、水族館を思い浮かべる人が多いだろう。海水で満たされた大きな水槽に、ジンバエザメからイワシまで、大小さまざまな生き物が展示された水族館。もちろん、台湾にも水族館は多数存在しており、来訪客を魅了している。しかし、魚がほとんどいない海の博物館も、台湾には存在する。その名は、国立海洋科技博物館だ。2014年、基隆市にオープンしたこの博物館は、生物を主に展示するのではなく、人間と海の結びつきをテーマとした展示を行っていることが特徴的である。この博物館の存在を知り、居ても立つても居られなくなった僕は、2023年9月に訪台した。実際に博物館を見学してみると、最新の海洋観測機器から、魚屋の店主のマネキンに至るまで、どこから見られない収蔵品が目白押しであった。特に興味深かったのは、「海へのメッセージ」という展示だ。この参加型展示は、博物館を見学した時に蘇った海に関する記憶を見学者自らがメッセージとして書き残すというものだ。過去に投稿されたメッセージを見ることもできる。子どもが書いたであろう、青一色描かれた壮大な海の絵や、海に連れて行ってくれた両親への感謝の言葉。過去の来訪者のメッセージを見るごとに、海と人間の深い結びつき

に対する解像度が上がっていく。

「私たちは大地に足をしっかりとつけ大海原に向かい、生命の大切さを追求し続けなければならぬ。」これは、前述の博物館にて最も印象に残った日本語の解説文だ。この作文を執筆していた2024年1月1日、令和6年能登半島地震が発生した。海岸に迫る津波の映像を見て、僕は海への畏怖の念を抱いた。僕たちは、北極における海水の減少や、海洋プラスチックの漂流に代表される、人間が海にもたらした問題を自分ごととして捉えるとき、人間には敵うべくもない海の恐ろしさも認識する必要がある。特に、海に囲まれた島国で暮らす僕たちは、衣食住のあらゆる場面で海の恵みを受け、海がもたらす災いに耐え抜いてきた。これからも海と僕たちが共生するために、海洋教育は重要な役割を果たす。パイオニアである台湾の取り組みを参考にしながら、教育学部の学生として、海洋教育の推進のために何ができるかを考えたい。

【参考文献】

田中智志編著『温暖化に挑む海洋教育―呼応的かつ活動的に』2020年 東信堂

優秀賞

台湾の社会について

横浜中華学院中学部 1年 宮川 心

私にとって台湾はとても身近な国だ。毎年、母の友人である台湾人の家に家族で訪れている。行く度に楽しい思い出ができるので、毎年楽しみにしている。ある日、私が夜市で迷子になったとき、おじいさんが一緒に母を待ってくれたことがある。このように、台湾に訪れる度に優しくしてもらっているので、台湾は私にとって家族のような存在だ。だから、自然とテレビで台湾のニュースが流れると耳を傾け真剣に見ている自分がいる。

日本ではまだ法的に認められていない「同性婚」。だが、同性婚を認める国が増えてきており、ヨーロッパや南北アメリカを中心に34の国と地域で認められているそうだ。そつした中、4年前、東アジアで初めて台湾で同性婚が認められた。

このニュースを聞いて、小さい頃お気に入りだった一冊の絵本を思い出した。私は小さい頃、夏休みによく図書館に連れて行ってもらっていた。その時に読んだ『タンタンタンゴはパパふたり』という絵本が気に入って、今でも印象に残っている。ロイとシロという二羽のオスのペンギンが恋に落ち、子どもを育ててパパふたりの素敵な家族ができるというお話である。当然オスのペンギンなので卵は生まれな

いのだが、ロイとシロは卵がない事に困惑してしまう。そんな二羽の様子を見ていた飼育員さんが、放置されてしまった卵を彼らの巣にそつと置いてくれたので、ロイとシロのもとに子どもができたのだ。この絵本を手にとった時、私はまだ幼くて、ロイとシロと同じようにどうして卵ができないのか、あまり意味がわかっていなかった。だが、飼育員さんがロイとシロを無理やり離そつとせずに見守り、そつと卵を置いて家族にしてあげた場面を読んで、なんて優しいんだらうと飼育員さんの優しさに心打たれ、この絵本が大好きになったのだ。

中学二年生になって、この絵本の本当の素晴らしさが理解できるようになった。この絵本は実話が基になっていることを知り、良い絵本に出会えたのだと改めて感じるこゝとができた。恋愛に性別や姿かたちは関係ないのだ。作者が伝えなかったのは、誰もが持つ自由ではないだろうか。

台湾で同性婚が認められたニュースが私にとって大きな意味を持つのは、もう一つ理由がある。私の友達が台湾で同性婚が認められたことをきっかけに台湾に引越したからだ。彼は、可愛いものが大好きで裁縫やお絵描き、へ

アアレンジなどが得意だ。私はよく彼から絵の描き方やヘアアイロンの使い方まで教えてもらっていた。だが、そんな彼の個性は周りに理解されづらく、最初はからかわれる程度だったが、それはどんどんエスカレートしていき、心に病を抱えてしまった。ある日、彼は私にこんなことを話してくれた。「台湾は東アジアで最初に同性婚が認められた国だ。ここに行けば自分の気持ちを分かってもらえるんじゃないか。」と。そして、一生懸命勉強して、台湾へと引越して行った。

言葉も違う国に行くのは簡単なことではない。それでも、私は自分の個性を貫こうと行動に移した彼を尊敬している。私も彼のように、「自分」を持った強い人間でありたいと思う。そして同時に、人々が持つ多様な「自分」を理解する人間でありたいと思う。私は性別、出身、姿など関係なく、他人に流されず、世間の常識にも囚われず、自分を貫いて生きている人は、とても魅力的だと思う。自分を見失わず、他人を尊重できる社会になつていつたら、より良い世界を創れるのではないだろうか。

まだ外の世界から学べることも多いと思う。いじめ、同性恋愛、差別など私たちが暮らす社会にはまだまだ多くの課題がある。台湾はそんな課題の一つの同性婚を法的に認め、より多くの難題に挑戦している。小さい島国、台湾。だけれど、台湾が築いている社会は、これからの世界の手本となつていくべきだ。私も台湾の人たちのように、人の個性を尊重できる人でありたい。人の姿かたちではなく、人の心を見たら、よりよい世界が創れるのではないが。

優秀賞

競技かるたがつかないだ 私と台湾

滋賀県立草津東高校 2年 北村 芽依

皆さんは競技かるたをご存知だろうか。これは作品『ちはやふる』の映画化により有名になった、百人一首を使用した一種のスポーツである。百人一首とは、ほとんどの人は学校等で学んだことがあるかと思うが、藤原定家によって約1000年前に集められた100首の和歌のことだ。私は3歳の頃から百人一首を読み、暗唱し、かるたと共に生きてきた。

皆さんは競技かるたをご存知だろうか。これは作品『ちはやふる』の映画化により有名になった、百人一首を使用した一種のスポーツである。百人一首とは、ほとんどの人は学校等で学んだことがあるかと思うが、藤原定家によって約1000年前に集められた100首の和歌のことだ。私は3歳の頃から百人一首を読み、暗唱し、かるたと共に生きてきた。

日本語で書かれた札を、日本語で聞いて取り合う。この競技かるたというスポーツは、日本人にしか出来ないのだろうと思っていた。しかし昨年、高校1年生のある日、私にとつて驚くべき話が舞い込んできたのだ。父から、「台湾のかるた会を見学に行ってみないか。」と言われた。台湾の東呉大学にはかるた会があるから、連絡をとってみないか、と。父は現在、アプリケーションによる競技かるたのオンライン大会等に携わっており、数少ない海外在住の選手とも知り合っていた。それまで私は、まさか海外にも「かるた会」が存在しているとは思っていなかった。台湾のかるたを見てみたいと思えば連絡すると、私が台湾へ研修旅行に行く際に見学させていただけることになった。私は元々台湾の大学への進学を検討してお

り、研修という形で東呉大学の学生さん達と交流やプレゼンテーションを行う予定になっていた。その東呉大学にかるた会があるというのだから、私にとつて大きなチャンスだった。

そして当日、大学生の方と交流をした後、ついにその時がやってきた。私は母に着方を教えてもらった袴を着て、緊張しながらかるた会へ足を踏み出した。そこでは、日本で私たちが行っている練習風景と同じ光景があった。それぞれが真剣に札と向き合う、音の格闘技が行われていた。5人の選手が私を迎えてくださり、練習試合もさせてもらった。初の海外での試合は、完敗だった。母語では無い言葉のスポーツに全力で取り組む姿から、5人の方の愛を感じた。強さも気持ちも負けたと、実感した。

この時私は、かるたを愛する外国人選手と交流出来たことへの喜びで胸がいっぱいだったが、この見学が終わった後、あることが気になった。それは、台湾における競技かるたの練習環境である。かるたには、和歌を読み上げる「読手」が必要不可欠である。東呉大学から台湾の大学への進学を検討してお

が使用されていたが、昔こそが命であるかるたにおいて、人がその場で読むというのは非常に重要だ。強い選手の中には、読み手の息遣いや1文字目の子音を聞き分けている方もおられるほどである。台湾に読手を務める人がおらず、資格を持つ人に読手をしに来てほしいという話まであったのだから、台湾の選手達は読み手が必要としている。読み手だけでなく、そもそも競技人口も少ないために、選手達は同じ相手と何回も試合しているのでは無いだろうか。私は彼ら、もっと良い環境でかるたを取れるようにしたい。

昨年逝去された、私の所属するかるた会の恩師・石沢直樹先生は、競技人口の少ない時代からかるたを愛し、様々な大会を創設された。誰よりもかるたと真剣に向き合い、広め、教え、現在の方界を作った先生は私の憧れだ。石沢先生が居たからこそ、私はかるたに出会い、今まで続けてこれた。ならば私も、台湾にかるたを広め、選手達ももっとかるたを出来るようにしたい。かるたを広めることとは、これからのかるた界を守ることに繋がる。現在、『ちはやふる』ブームが過ぎたことによる選手の減少に加え、大会を運営する人の

不足が問題である。かるたには人口というものも存在しないため、大学生や社会人になればやめてしまう人も多い。私の周りでは、かるた会に所属する選手の親や大人達が運営を担っている。台湾を第1歩として、世界にかるたを広まればこの心配も解消される。これからのかるた界を創っていくのは私たちだ。だからこそ、真剣に考えたい。

東呉大学で交流をさせていたいただいた学生さん達は気さくで、優しく、そして私のプレゼンテーションを真剣な目で聞いてくれた。夜市で利用した店の人は、私の拙い台湾華語を、言えるまで待ってくれた。いつだったか、台湾についてのWebサイトで目にした「台湾最美的風景是人」という言葉は本当にその通りだった。そんなあなたがい国、台湾で、私の魂であるかるたを広めたいのだ。私に出来ることは小さなことかもしれない。それでも私は、たくさんの方の台湾の人とかるたを語りたい。そのためにまず、台湾の大学への進学を目標に今、勉強をしている。台湾に留学して、もっと現地のことを知りたい。そんな夢を持って、今日も私は台湾華語のレッスンを受ける。

優秀賞

「台湾」が
「台湾」になったとき

東京都立桜修館中等教育学校 5年 前田 碧生

私のなかで、「台湾」が「台湾」となったのは、11月の麗らかな太陽の下であった。

昨年に初めてその地を訪問するまで、私からは遠い、無機質な名前だった「台湾」。それは「台湾」という、人肌を帯びた温かな思いの象徴へと変わった。その変化は、夏の気候やおいしいローカルフード、魅力的な街並みや多彩な観光地を巡ったことだけによって起こったのではない。一番の変化を私にもたらしたのは、訪問中に出会ったやさしさに溢れる台湾の方々との交流、特に台湾の高校生との交流だ。

台湾の高校生との交流は私にとって非常に印象深いものだった。彼らの熱烈的な歓迎、思いのこもった文化アクティビティ、一緒に食べた給食。絶えず笑顔で話をしてくれた彼らの顔を今でも目に浮かぶ。だが、今でも鮮烈な思い出なのは、彼らとの他愛もない、だが鮮烈な会話だ。英語で、身振り手振りで、あるいは翻訳アプリを使つてのコミュニケーション。話題は多種多様、互いの学校生活から日常、趣味、自国の文化……そこにはもう、文化も距離も時差の壁もなかった。知らぬ間に私は彼らの週末のルーティーンを把握し、クラブの成績と共に一喜一憂し、好きなアーティストの話で盛り上がりつつあった。私と彼

らは既にもう、友人になっていった。彼らと別れる時、胸をキュッと締め付けられた気がしたのは友人と別れるのがつらいからなのだろう。私はそう思っていた。

でもその感覚は哀しいだけじゃない。ふと、台北へ向かうバスの中で気が付いた。あの胸の締め付けられた感じは、「悲しさ」だけでなく、「悔しさ」も含まれるのだろう。と。交流の時を思い返す。彼らが台湾独自のことを誇らしげに紹介してくれた後、「How about Japan」と聞かれたこと。なんとか英語で答えながらも、その言葉の薄っぺらさをもどかしく思ったのだ。それだけでない。彼らが日本統治時代のことを話してくれた時、申し訳なく思った私が顔をゆがめたのを見て「歴史と感情は別だから。歴史は光も影もある、でしょ」と言ってくれたこともあったのだ。報道や事前学習で台湾をなんとなく知っていたつもりだったが、まったくそんなことはなかった。それ以上に、自分が日本について何を知っているのかと思った。彼らの自信にあふれた姿がまぶしくて、ちょっと、悔しかった。

い、独自の発展を遂げた台湾文化の数々。台湾の人々が民主政治を求めて戦い、そして民主主義を勝ち取り発展させていった軌跡。日本統治時代の弾圧的支配の中にも、技師の八田與一を中心として行われたダム・お茶の運搬を支えた高山鉄道の建設により台湾の人々の生活が変化した側面があること。双方で多発する自然災害と、その助け合いの絆。台湾と日本は昔から関係性があり、人々の思いが紡がれて歴史となっているのだと気が付いた。その光も影もある過去を知ることで、そして日本と台湾の双方の今を覗くことが未来を照らす羅針盤なのかもしれないと思った。双方が互いをよく知り、立場の違いを尊重しながらも強みを生かして共に発展を目指していく、そんな関係性になってほしいと考えた。

だが、その思いは同時に、私にも一つ一つの問いを投げかけてくる。「自分は何ができるのか。」と。台湾の歴史とやさしさにふれたからこそ、かつて両国の懸け橋を築いた多くの人々の様に私も彼らの思いに応えていきたいと思う。そう思う一方、台湾に関する報道を日々見聞きするたびに自分の無力さを感じるのだ。緊迫・圧力・有事。そんな言葉が登場する度に、「どうにか力になりたい」という思いとは裏腹

の、自分の存在の小ささを痛感する。彼らにとって、私は隣国の一介の高校生に過ぎないのかもしれない。それでも私は、日本と台湾双方の繁栄と地域の平和を通じた彼らの幸福を強く願っている。微力かもしれないけれども、そんな私ができるのはただ、その願いを友人に伝えることなのではないだろうか。思いは伝えられて初めて意味を持つものだ。私は彼らの思いにこたえたいと思う。交流の中で出会った彼らのように、まっすぐ、自信をもって。知ったこと、願うこと、それを自分の言葉ではっきりと伝えることで。

優秀賞

台湾人の彼を思って

福島県立ふたば未来学園高校 2年 酒井 菜々子

私と台湾の出会い、フランスだった。

二〇一三年に私は交換留学生としてフランスへ行った。フランス語は未経験、英語もそんなに上手くない。交換留学なので、現地の高校へ通うことになっていた。知り合いがいらないどころか、言語すら通じない場所。不安ばかりだったが、とにかくコミュニケーションだけでも、と思い放課後は語学教室に通った。

そこで出会ったのが、台湾人の彼だった。彼も交換留学生で、英語もフランス語もあまり得意ではなかった。

同じ東アジア人で、語学力も同じくらい。似た者同士の私たちは恥を捨てて、とにかく話した。互いに高めあった。拙い言葉で、自分たちの夢を語った。彼はとても覚えるのが苦手だったから、主語と動詞の活用を一緒にたくさん練習した。いろいろ知識と出会うことができた。フランス語の、日本語の、面白いところも、悪いところも。

フランス語をはじめとするラテン系言語は、日本語や英語に比べて少し差別的だと感じることもある。名詞は性別があつて、日本語では「あなたは日本人ですか?」と聞いているだけでも、フランス語では日本人の男か女かで言葉が変わ

る。それを見分けなければならぬ。「あなた」を超えた区別が必要になる。

そして、忘れられないひとつの事件があつた。国にも性別があるの、それを分けようという授業だった。例えば日本は男性だから、*un Japonais*、女性は *une Japonaise*。そうやって区別する、それだけの授業だった。彼の出身地、台湾の話になった。「女性名詞? 男性名詞? どっちだろう?」先生は問うた。私は男性名詞だと思つたので、*au*だと答えた。

正解は、*a* だった。
a は、県やエリアなどに使う言葉だ。

日本語では「台湾で」、英語では「*in Taiwan*」。だけど、フランス語では台湾は他の国とは明らかに違つた。私も、台湾は別国の小さな部分でしかないと言われた気分だった。今までは気づけなかった、小さいけれど大きなこの違和感。先生の答えを聞いた時の、彼の理解できないという、苦しそうな顔は、耐え難いものだった。

それから時間が経つて、私たちもそれなりにフランス語を話せるようになった頃、私が先に帰国することになった。お互いに帰国したいと思つた時、支え合ってきた仲。彼は僕だつて帰りたいのに、と冗談交じ

りに挨拶に来てくれた。本当に寂しくなるよと、最後に台湾名物のパイナップルケーキをくれた。小さい袋が8個。日本に帰ってきてから友達と食べたそれは、ホロホロとした食感で、懐かしい気持ちになった。

日本に帰ってきてから、思つていたより台湾が身近だったことを知つた。毎日のように流れてくる台湾のニュース。気にも留めていなかったけれど、今は彼の顔が浮かんでくる。不安なニュースが流れるたび、彼が毎日愛おしそうに見つめていた、スマホケースに挟まつたチエキを思い出す。彼と彼女が海で撮つたもの。彼女は日本が大好きなんだと笑つていた。今、彼女や友達も元気なのだろうか、会つたこともないのに考えてしまつて、おかしな気持ちになる。

いつか、台湾に行こう。彼がくれたあのパイナップルケーキの味を忘れる前に。私にとつての新たな文化であり、彼にとつての当たり前前の文化を知ろう。彼が帰国したら、私たちよく頑張つたねと日本からお土産を持つていこう。あなたの国が大好きだよと伝えよう。そしていつか、フランス語で彼が自己紹介をする時、*au Taiwan*と言えたら素敵だなと思つ。

優秀賞

私のパキラ

中央大学杉並高校 3年 牧野 莉乃

私の祖父の家には一本の木があった。その木はとても細々としていて小さかったが存在感だけは一人前である。見た目は軟弱そうなのにとても目立つ。私はこの木が大好きだ。祖父の家に行く度私はこの木に挨拶をし、ぼーっと見つめてから家に入る。暇を持て余してはまたこの木を見に行く。私がここまでこの木に愛着を感じているのにはちゃんと理由がある。この木は私が生まれた日に祖父の家で育つてきたのだ。この木と一緒に私は育つてきた。それは私にとっても感慨深いものであり、心の支えでもあった。

夏のある日、祖母が「大きくなったら庭に植えてみよう」と言ってきた。祖母の家は新潟県にあり、夏と冬の気温差が激しい。明らかに植え替えるほど成長していないし、何よりこの気温差に負けてしまいうさだとは思ったが私は植え替えるに賛成した。何ヶ月か経って祖母から送られてきた写真には葉が全くなかったあの木が写っていた。もはや木ではなく枝のようになっている。それでもあの木は根を張り続け、祖父の庭に居座り続けた。年季の入った「りの木」と書かれた名札をぶら下げながら。

あの木は容赦なく切り倒された。私は心のどこかで大人になってもこの木は私と一緒に育ち続けるものだと思っていた。祖父の話によるとあの木はパキラという観葉植物であった。スマホで調べて出てきた画像を見て私は思わずえっと声を出してしまった。出てきた画像のパキラは私のパキラとは比べものにならないくらい茎が太く、葉は綺麗な濃い緑色であったのだ。正直なところ別の植物だと思っただけだった。私はこの時初めて身を切られるような思いに襲われた。そして非常に後悔した。もっとあの木のことに知ろうとしていけばこれからは先も一緒に成長していけたのではないかと。

パキラの木について調べていくと面白いことが分かった。パキラの木は別名で「発財樹」といい、その名のとおりにこの木には金運がアップするお金のなる木という意味も持つ。これは昔台湾の貧しい農民がパキラの苗を売る商売を始めた途端それが繁盛し、貧困から脱出できたという話から来ているのだ。以後台湾ではパキラの木が盛んに栽培され、日本で売られているパキラの大半が台湾から輸入されている。それを知った時、台湾に対する親近感が一気に湧いた。私のパキラのふるさと台湾。それは一体どんな国なのだろうか。私は台湾に行ったこともなければ、台湾人の知り合いもない

い。けれど台湾から来た私のパキラの強さなら知っている。それは私にとつて台湾の魅力を知りたいと思うには十分すぎるきっかけであった。

それから調べていくと、私と同じように、木の繋がりにより台湾との関係を深めるプロジェクトが行われていることを知った。それは2012年に行われた、絆の桜植樹プロジェクトである。絆の桜植樹プロジェクトとは2011年に起こった東日本大震災の被災地復興支援として台湾がしてくれた200億円の義援金や台湾人の積極的な募金などに対しての感謝の意として、200本の桜を台湾に植えるというプロジェクトだ。日本の民間団体、日台スポーツ文化推進協会が台湾の八田與一記念公園に植樹することを決定した。日本の河津桜を台湾の固有種に接ぎ木したこの桜は「絆の桜」と呼ばれている。

3年後には霧社事件のあった霧社にも500本の桜が植えられた。霧社事件は先住民であるセテック族約300人が、運動会が行われていた公学校を襲撃し1000人あまりの日本人と台湾人2名が殺害された事件である。この悲惨な事件から85周年を迎えることからこの場所に桜を植えることで永い友好関係を構築していくことを目標としている。木というのは人よりも何倍も長く生きる。絆の桜が生き続ける限り台湾と日本の絆は続いていく

だろう。現在だけでなくこれからも日本と台湾の絆を深めていくという想いが込められたこのプロジェクトに私はとても心を打たれた。

最近では能登半島地震での台湾からの支援金など普段の生活の中でも台湾と日本の繋がりを耳にする事が多い。台湾から来た私の思い出の木、パキラ。日本から来た日本と台湾の架け橋の木、絆の桜。形は違えど何か自分の中で台湾に強い繋がりのようなものを感じたのもその内の一つだろう。日本と台湾。木を通して互いの国の人と人が繋がる。それはとても素晴らしいことだと思っ

私は台湾と日本のこのような関係がこの先も続くことを熱望している。台湾、日本の固有の自然を守っていくために出来ることはたくさんある。特に台湾ではスマートフォンとSNSの普及率が極めて高い。SNSを通じてお互いの国の自然の良さをプロモーションしていかたいと思う。

自分のいる環境がどんなに変わっても私のパキラは強く生き続けた。私もあの木のようになりたいと思う。そして私も、絆の桜を実際に見て日本と台湾の絆を感じたい。小さなきっかけでも大きな社会に繋がっていく。多くの人が植えた、絆の桜がいつか誰かの背中を押すことを願っている。そう、私のパキラのよう



宣伝・PR、メディア掲載報告

今回実施された宣伝・PRおよびメディア掲載事例の抜粋を紹介します。

日台文化交流 青少年スカラシップ 作文募集

産経新聞社は、将来の日台友好に貢献する人材を育てることを目的に「第20回日台文化交流 青少年スカラシップ」(協賛・JR東海ほか)を実施します。日本人の学生が対象で、応募は作文のみ。審査委員長の拓殖大学顧問、渡辺利夫氏らが選考にあたります。

締め切りは令和6年1月12日(金)。「台湾に関すること」をテーマにした作文(言語・日本語)を2000字以内でご応募ください。今回はスピーチ部門の募集はありません。大賞・優秀賞の受賞者は、コロナ禍で実施できなかった台湾研修旅行(3月下旬予定)に招待します。

詳細は二次元コード、または<https://adv.sankei.com/scholarship/>。問い合わせは、日台スカラシップ事務局(産経新聞社メディア営業局内、電話03・3275・8675)平日午前10時〜午後6時、Eメール scholarship@sankei.co.jp まで。



産経新聞(全国版) 2023年11月8日付

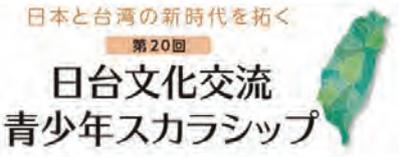
産経メディアラボ
@Sankei_SalesAdv

《第20回日台文化交流青少年スカラシップ募集開始》

「台湾に関すること」をテーマにした作文(言語・日本語)を学生を対象に募集します。2000字以内でご応募ください！
今回、コロナ禍で中止になっていた台湾研修旅行(3月下旬予定)を再開。大賞と優秀賞の受賞者をご招待し、日台の相互理解・交流を深めます。

締め切りは2024年1月12日(金)まで。

詳しくは公式HPへ
adv.sankei.com/scholarship/
#日台 #台湾 #文化交流



午前9:41・2023年11月8日・442件の表示

産経メディアラボX 2023年11月8日付

THE SANKEI NEWSROOM

トップ 速報 ランキング 政治 国際 社会 経済 スポーツ エンタメ ライフ オピニオン イベント 会員制

中国・台湾 朝鮮半島 アジア 北米 中南米 欧州・ロシア 中東・アフリカ 国際問題

「第20回日台文化交流 青少年スカラシップ」作文を募集

2023/11/8 07:00

産経新聞社は、将来の日台友好に貢献する人材を育てることを目的に「第20回日台文化交流 青少年スカラシップ」(協賛・JR東海ほか)を実施します。日本人の学生が対象で、応募は作文のみ。審査委員長の拓殖大学顧問、渡辺利夫氏らが選考にあたります。

締め切りは令和6年1月12日(金)。「台湾に関すること」をテーマにした作文(言語・日本語)を2000字以内でご応募ください。今回はスピーチ部門の募集はありません。大賞・優秀賞の受賞者は、コロナ禍で実施できなかった台湾研修旅行(3月下旬予定)に招待します。

詳細は公式ホームページ(adv.sankei.com/scholarship/)で。問い合わせは、日台スカラシップ事務局(産経新聞社メディア営業局内、電話03・3275・8675=平日午前10時〜午後6時、Eメール scholarship@sankei.co.jp)まで。

ジャンル : 国際 | 中国・台湾 イベント | その他

産経ニュース 2023年11月8日付



作品募集パンフレット



産経新聞 作品募集広告



1位スコッティ・シェフラー (米国)、2位ロリー・マキロイ (英国) は変わらず。ウィングダム・クラーク (米国) が2つ上げて3位に浮上した。(共同)

産経ニュースSPレクタングル
2023年11月20日~12月25日



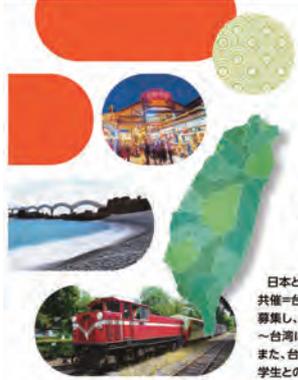
日本と台湾の新時代を拓く

第20回

日台文化交流 青少年スカラシップ

日本と台湾の青少年による文化交流の促進を目指す「第20回日台文化交流 青少年スカラシップ」(主催=産経新聞社、共催=台北駐日経済文化代表処、協賛=JR東海、三井物産、エバー航空、台湾新聞社)。今回は作文部門で学生作品を募集し、375点の応募があった。大賞には、中学・高校生で山本旭華さん(高校1年生)の「世界につながる心の一台湾に学ぶ」、大学生で永井光洋さん(京都大学3年)の「台湾と海洋教育―光る海とともに生きる―」が輝いた。また、台湾への研修旅行も5年ぶりに復活し、大賞と優秀賞の計8名の学生が参加する。3月26日に日本を立ち、現地学生との交流や政府機関への訪問を実施し、日台の交流を深める。

※第20回はスロープ部門(職業系)は設けませんでした。



「台湾と海洋教育―光る海とともに生きる―」
大賞 永井光洋 (京都大学3年)

作文部門
大学生の部
大賞
台湾と海洋教育
―光る海とともに生きる―
応募者名 永井光洋

「世界につながる心の一台湾に学ぶ」
大賞 山本旭華 (高校1年生)

作文部門
中学・高校生部
大賞
世界につながる
心の一台湾に学ぶ
高橋直也 山本旭華

「台湾と海洋教育―光る海とともに生きる―」
永井光洋 (京都大学3年)の応募文は、台湾の海洋資源と教育の重要性を説き、日台間の海洋協力に期待を込めた。台湾の美しい海岸線と豊かな海洋資源は、持続可能な発展の鍵を握っている。海洋教育を通じて、若者が海洋の恵みを正しく理解し、責任を持って利用できるようになることを願う。また、台湾の海洋文化や伝統も、日本の海洋文化と共有し、相互に学び合うことで、日台間の絆を深め、平和な未来を築いていくべきだと訴えている。

「世界につながる心の一台湾に学ぶ」
山本旭華 (高校1年生)の応募文は、台湾の歴史と文化の魅力を語り、日台間の文化交流の重要性を説いた。台湾は長い歴史と豊かな文化を誇る国であり、その歴史と文化は、現代の台湾を形作る重要な要素となっている。また、台湾の自然環境も、その魅力を高める重要な要素となっている。日台間の文化交流を通じて、お互いの歴史と文化を学び合い、相互に理解し合うことで、日台間の絆を深め、平和な未来を築いていくべきだと訴えている。

「台湾と海洋教育―光る海とともに生きる―」
永井光洋 (京都大学3年)の応募文は、台湾の海洋資源と教育の重要性を説き、日台間の海洋協力に期待を込めた。台湾の美しい海岸線と豊かな海洋資源は、持続可能な発展の鍵を握っている。海洋教育を通じて、若者が海洋の恵みを正しく理解し、責任を持って利用できるようになることを願う。また、台湾の海洋文化や伝統も、日本の海洋文化と共有し、相互に学び合うことで、日台間の絆を深め、平和な未来を築いていくべきだと訴えている。

「世界につながる心の一台湾に学ぶ」
山本旭華 (高校1年生)の応募文は、台湾の歴史と文化の魅力を語り、日台間の文化交流の重要性を説いた。台湾は長い歴史と豊かな文化を誇る国であり、その歴史と文化は、現代の台湾を形作る重要な要素となっている。また、台湾の自然環境も、その魅力を高める重要な要素となっている。日台間の文化交流を通じて、お互いの歴史と文化を学び合い、相互に理解し合うことで、日台間の絆を深め、平和な未来を築いていくべきだと訴えている。

- 優秀賞 (4名)
- 志田 心 (関西国際大学 1年)
 - 北村 芽々子 (関西国際大学 2年)
 - 前田 碧生 (関西国際大学 3年)
 - 下田 隆聖 (関西国際大学 1年)
 - 酒井 菜々子 (関西国際大学 2年)
 - 牧野 莉乃 (中央大学 3年)

- 審査委員
- 審査委員長 渡辺 利夫 (京都大学 顧問)
 - 黄明珠 (台北駐日経済文化代表処 広報部 部長)
 - 河崎 真流 (東京国際大学 国際学部 教授)
 - 阿古 智子 (東京大学 総合文化研究科 教授)
 - 林翠儀 (自由時報 東京特派員)
 - 藤村 明 (産経新聞 編集長)

主催: 産経新聞社 共催: 台北駐日経済文化代表処 協賛: JR東海 MITSUI & CO. EVA AIR 台湾新聞社
協力: 外交部 教育部 台湾日本関係協会 Taiwan 台湾観光庁 後援: 日本台湾交流協会 自由時報

第20回 日台文化交流 青少年スカラシップの審査を終えて

東京国際大学 国際関係学部教授、元産経新聞台北支局長 河崎 眞澄

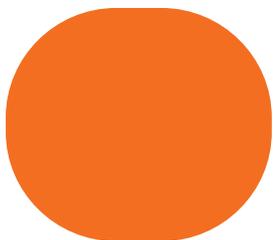
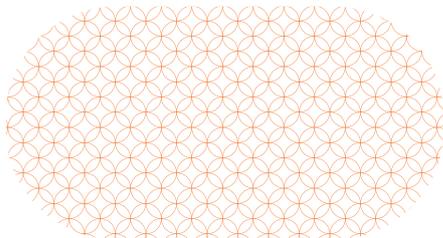
私が産経新聞台北支局長であった当時、画期的なプロジェクトとして始まった「日台文化交流 青少年スカラシップ」で、数多くの中高生や大学生を現地に招いた「台湾研修旅行」が今年、新型コロナウイルス禍の収束を経て、再開されたことに感謝しています。日本に暮らす青少年に台湾の真の姿を自分の眼で見てもらい、家族のように近いお隣、台湾の人々との交流を体験してもらうことが、若いみんなの人生を大きく変えていく原動力になり、このことが将来、日本や台湾、そして世界の民主主義社会の安定や繁栄につながる、と考えているからです。

みなさんは「バタフライ効果」という言葉をご存じですか？どこかで羽ばたいた蝶（バタフライ）が起した小さな風が、遠く離れた場所で竜巻となる、というお話で、小さな変化がいつか、予測もしなかった大きな変化を引き起こすことがある、という理論の寓意的な言い換えです。日本と価値観を共有するかけがえのない存在の台湾ですが、残念なことに日本政府は台湾を「国家」と認めておらず、国交さえありません。そこに国際政治の厳しい現実が横たわっています。

ただ、台湾に関心を寄せて作品を送ってくれた一人一人、そして台湾研修旅行に参加されたみんなが、台湾に暮らす人々の優しさや心の強さに触れ、台湾人が自らの手で作り上げた民主主義社会を肌で感じることで、心の中に「蝶の羽ばたき」が起きるはずですよ。ブルメヤ景観だけが台湾ではありません。民間どうしの強く深い信頼関係と文化交流で結び付いている日台の関係を、どう考えていったらいいのか。自分の人生に、そして国際社会に竜巻を起さず、一緒に生きてください。

高槻高等学校の山本旭隼さんが書かれた作品で、大阪の本屋さんで出会った台南出身のおじさんが歌ったという「台南進行曲」とそのストーリーは、映像まで浮かび上がりました。京都大学の永井光洋さんが着目した「海洋教育」の分野は、海で国境を接する日台関係の次なる重要な手がかりになるかもしれません。中央大学杉並高等学校の牧野莉乃さんが描いた思い出の木、台湾からやってきた「パキフ」と、祖父母との大切な記憶。「絆」という言葉が、私には蝶のはばたきのように感じられました。さあ、人生はここからスタートですね。

第20回日台文化交流 青少年スカラシップ 実施報告書
発行・編集：産経新聞社



主催:  産経新聞社

共催: 台北駐日經濟文化代表処

協賛:  JR東海  MITSUI & CO.



臺灣新聞社
TAIWAN NEWS

[https://
adv.sankei.com/
scholarship/](https://adv.sankei.com/scholarship/)

